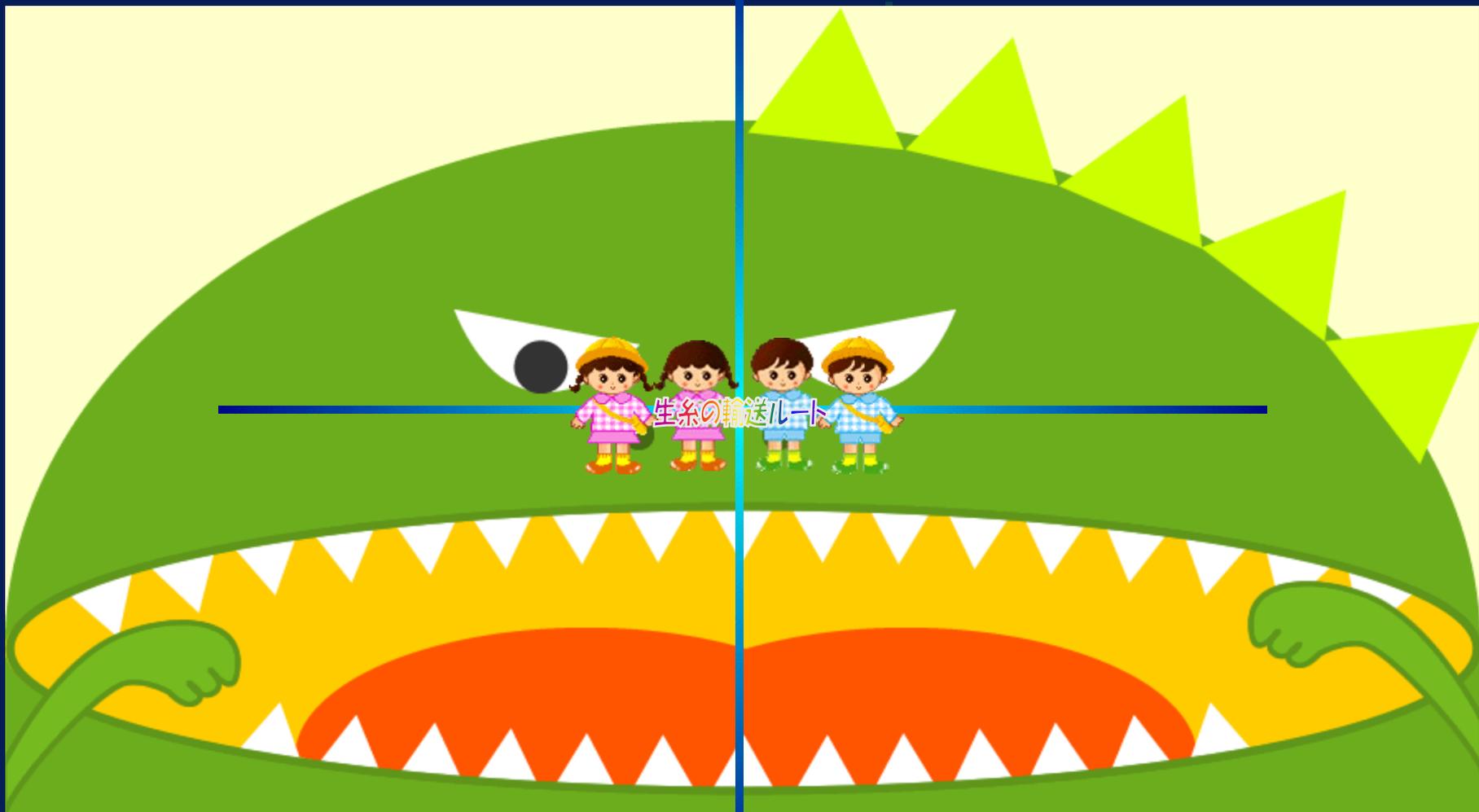


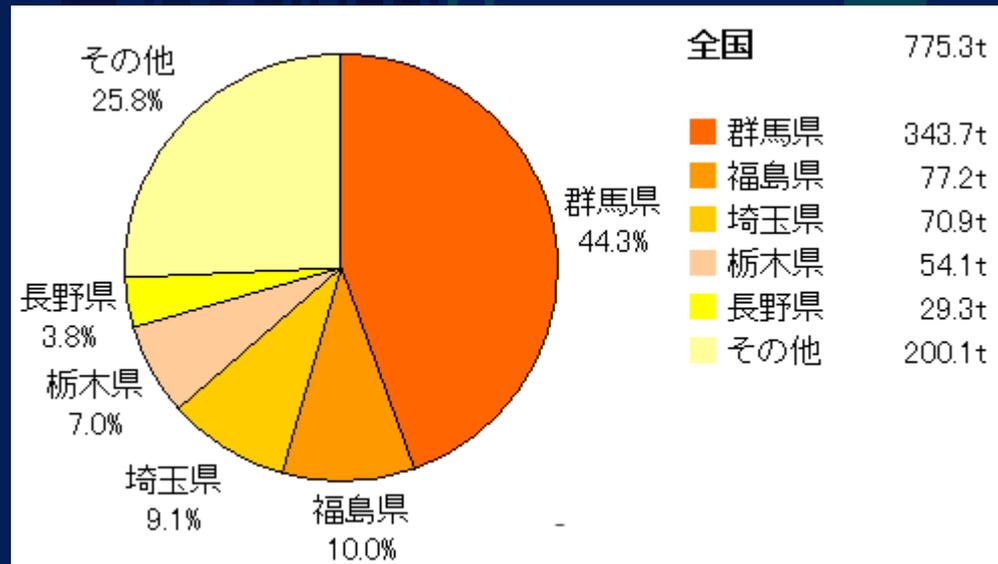
ようこそ





スライドショー26枚再生【5秒間隔】

養蚕県



北関東では昔から飼って繭を取る養蚕業が盛んでした。もっとも盛んだった昭和のはじめ～40年代には及びませんが、今でも行われていて、群馬県が全国一位で、群馬県の繭生産量は全国の約4割、生糸は約6割を生産する全国一の養蚕県です。群馬県に次いで福島県、埼玉県、栃木県、長野県の順。



一ノ瀬 明治28年(1895)
山梨県の一ノ瀬益吉が鼠返の苗木の中から選出

一ノ瀬および改良鼠返が戦後から普及をし始めてきた。とくに昭和30年ころ以降、年間条桑育の普及にともない、夏秋蚕期の条桑収穫法と蚕期別の桑園設定が最大の課題であった。このなかで、桑葉が中程度で、比較的枝条が細く、節間が短くて、萎縮病にも中程度の抵抗性を持つ多収性で葉質も良い条桑育に適する一ノ瀬と萎縮病にはやや弱い葉は中程度で比較的枝条が細く、節間が短くて、条桑収穫に適する改良鼠返の2品種が、わが国の桑園面積の過半数を占めるに至った(積雪地帯と西南暖地を除く、昭和39年には一ノ瀬43.9%、改良鼠返19%)。なお、一ノ瀬はとくに温暖地や暖地の春秋兼用桑として適したが、地域によって枝条が倒伏する欠点があり、とくに夏刈り後の日照不足や夏秋蚕期に強い風雨を受けた場合に倒伏がはなはだしく、倒れた枝条から側枝が発生する。機械の使用にも不便であることがしばしば指摘されていた。

養蚕農家 国の重要文化財

旧新井家住宅 埼玉県秩父長瀬町



富沢家住宅 群馬県中之条町



江戸時代中期(1745年頃)に建てられた古い民家。国の重要文化財に指定されている。建物構造は、かつて長瀬に多く見られた養蚕農家の姿をよく表している。板葺きの屋根や、建屋の中に設けられた馬屋、屋根裏のアケビのつるで結わえられた「もや」が特徴。



蚕が繭を作る回転簇

この住宅の建築年代は江戸時代の後期と推定され、家屋の形式は茅葺き・入母屋造り（間口13間半、奥行7間）です。屋根の正面が「かぶと造り」の大型養蚕農家の代表的なものです。



絹産業で栄えた群馬県南部



富岡製糸場を中心に絹産業で栄えた群馬県南部



養蚕農家集落（赤岩集落）
重要伝統的建造物群保存地区

製糸全盛期の釜口橋(水門)付近
昭和初期

生糸のまち 長野県岡谷



昭和5年の岡谷地区製糸工場群

明治5年(1872)10月群馬県富岡で開業された官営富岡製糸場は幕末、維新期の最大の輸出商品となった生糸の品位の向上と生産奨励のために、当時の製糸業先進国であったフランスの器械、技術を導入、技師、教婦等を招聘、また国内各地より伝習生を募集して新技術の移植普及を図った。同場で教育された伝習生は各地に帰り、その地方で簇生しつつあった生糸工場に技術を伝えていったが、中でも長野県諏訪地方では盛んな養蚕と豊富な用水に加えて、交通の利便と同地方の進取の気性とが相まって製糸事業を興す人が多く、明治10年代半には全国最大の製糸業地となっていた。殊にその中心地たる平野村(現在の岡谷市)では全村をあげて糸を繰ったというほどであった。開国とともに海外に輸出される重要貿易品となった生糸。生糸生産は明治、大正、昭和初期にかけて飛躍的な発展をし、なかでも長野県下の生糸生産高は独自の器械製糸技術の開発によって明治12年には全国の36%を占めるに至った。その中心地が岡谷。全国にあった約3000の製糸工場のうち、上位を岡谷が独占した。製糸結社から独立し、県外に進出して経営を拡大する製糸家が続々と登場した。片倉、小口、山十、岡谷製糸、丸興、神栄、等々繭を煮るため製糸工場のボイラーが焚かれ、煙が勢よく上がり、岡谷の空を焦がした。製糸工場の原料繭は購入してから繰糸までの間、貯繭の必要がある。製糸工場は繭倉庫を建築し、その数は市内合計105棟という数にのぼった。白壁土蔵造りの4・5層から6層の建物は、まさに1,000本の煙突とともに生糸の町・岡谷の象徴であった。長野県(明治23年までは筑摩県)諏訪郡。諏訪湖の西端に面し、用水と交通の便から幕末期から製糸に従事する戸数が多く、全国屈指の製糸業の町となった。村内の繰糸釜数は、大正元年36,286、同11年76,825(全国比25.8%)である。製糸業の拡充とともに同村の人口も激増し、大正9年の国勢調査では44,278人、うち女性が70%を超える特異な様相を示していた。昭和5年の同村器械製糸工場数は106、うち山十製糸(のちの昭栄製糸)は6工場であった。同村は昭和11年に一村のみで市制を施行し、製糸工場の多い中心部落の名をとって岡谷市となった。戦時中の製糸業の縮小に伴い精密機械工場を誘致し、また隣村の川岸、長地面村を合併、現在に至っている。同村の歴史を誌した「平野村誌」(昭和6年刊)は単に一村の史書であるのみでなく、戦前の製糸業史を誌した貴重な文献となっている。

参考；岡谷市教育委員会「ふるさとの歴史 製糸業」,平成6年10月22日発行より

與謝野晶子

源訪の湖 天竜となる 釜口の水 しづかない 絹のごとくに



岡谷 今でも生糸の町



初代片倉兼太郎 生家

「生糸の都」として明治・大正・昭和のはじめにかけて製糸業が栄えた長野県岡谷市。最盛期には3万人を超える女子工員が各地から集まり、諏訪湖畔の町はにぎわった。岡谷には至るところに繭倉(まゆぐら)や製糸工場の煙突が立ち並び、「岡谷のスズメは黒かった」といわれるほど製糸一色の街であり、世界一の生糸輸出国の中核的役割を担った。

製糸工場の煙突群は消え去り、繭を保管した倉庫も大半が取り壊されたが、今も西洋建築の事務所跡や立派な経営者宅が残っている。岡谷では製糸工場の経営者を「製糸家」と呼んだ。最も有名なのは現在の片倉工業を生んだ初代・片倉兼太郎(1849~1917年)だ。約135年前に天竜川沿いに洋式機械を使った「垣外(かいと)製糸場」をつくった。後に片倉組と称し1910年には本部事務所を建設。同事務所は現在、片倉工業から分かれた中央印刷(本社東京)が使っており、外観だけの見学が可能だ。

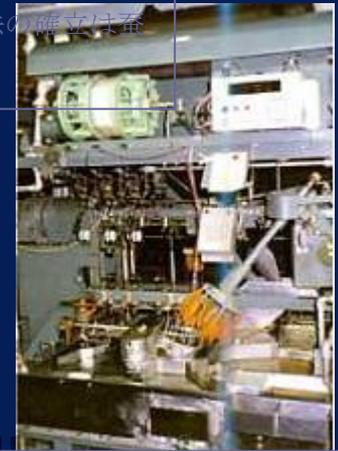
もう1人、明治9年に天竜製糸所として創業した一山カ林製糸所の初代林国蔵(1846~1916年)の旧居宅。旧林家住宅」として残り、公開されている。金唐紙の和室がある貴重な文化遺産。国重要文化財。

繭検定法の確立 昭和6年

昭和初期から昭和20年代前半にかけては、製糸の生産方式が座繰繰糸方式から多条繰糸方式へと順次転換された年代といえよう。

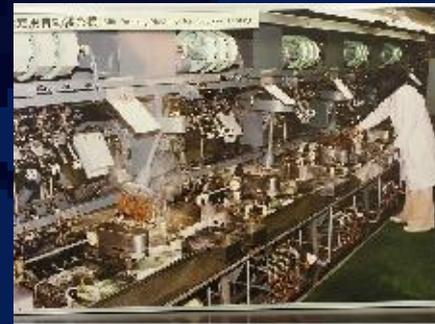
国は、昭和6年に蚕糸試験場の研究成果に基づいて繭検定規程基準を作成し、昭和9年には繭格付暫定案を定めた。その後、諸般の準備期間を経て、昭和15年には蚕繭処理統制法の規定により、いわゆる強制検定制度が確立された。この結果、繭の取引は公正に行われるようになり、繭質改善にも寄与し、蚕糸業の発展に大きく貢献している。

昭和15年以降においても、繭ならびに生糸の生産実態の変化に対応して、繭検定格付方法は幾多の改善改正がなされて今日にいたっている。その主なものとしては、昭和30年に座繰機検定から多条機検定への移行措置がとられ、昭和49年には自動機検定への切換えが行われたが、それぞれの検定繰糸機の試作研究とそれらによる検定方法の確立は蚕糸試験場の研究成果を中枢として行われたものである。



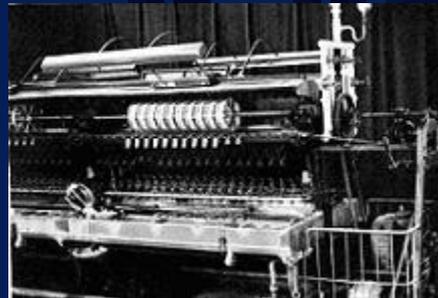
自動繭検定システム

平成5年



繭検定用自動繰糸機

昭和50年



繭検定用多条繰糸機

昭和30年



座繰り検定

昭和30年以前

生糸の輸送 群馬県南部から八王子へ

（編集：運輸総合研究所）

2015年(平成27年)1月18日(日曜日)

巻頭 巻頭 巻頭 巻頭

八高線のダイヤセル列車(左)と電車ダイヤセル列車は高麗川駅から高麗川方面に、電車は川越駅直通で川越駅へ向かう(高麗川駅で八高線を通っていた15系気動車(1979年撮影・毛呂山町歴史民俗資料館提供))



八高線停車駅の乗車人員

東飯能	5,583
高麗川	4,711
毛呂	764
毛呂	723
小寄町	593
小寄町	417
児玉	352

※2013年度の1日平均乗車人員(竹内折原用夫氏提供)

風光明媚な田舎地帯を、軽油を燃料とするダイヤセル列車が走る。昨年10月、八王子―高麗川間の全線開通から80年の節目を迎えたJR八高線はかつて、秩父地方のセメントや群馬県南部の絹糸の貨物輸送で栄えた。すでにモノを運ぶ役目は終了、日高市の高麗川駅以北では1日20本ほどの旅客運行のみだが、住民の通勤・通学などの貴重な手段として、エンジン音を響かせ続けている。

JR八高線 ⑤

「八王子方面への通勤客や買い物客で、いつも駅はにぎわっていた。毛呂駅(毛呂山町)の近くで80年近く営業する「モリタ洋品店」の店主、森田一郎さん(81)は、八高線が開通して間もない頃の風景を覚えていた。森田さんは、長男、孫と3代にわたって、八高線を通学に利用してきた。蒸気機関車(S1)の頃は、勾配が急な坂で立ち往生することもあり、「男子学生たちが列車から降りて、後ろから押したこともあった」と振り返る。



昨年11月まで、八王子―川越駅間で205系車両の先頭に付けられた「80周年」のマーク

貨物から旅客へ 80年の歴史

八高線は秩父地方のセメントなど、貨物輸送に大きな役割を果たした。その記録の一端が、毛呂駅のある毛呂山町の歴史民俗資料館に残されている。



同館所蔵の「毛呂駅運輸成績表(1933.4〜35年、当時の毛呂村作成)によると、秩父鉄道の秩父駅で積まれたセメントをはじめ、

のどかな風景 今も

錦糸町駅(東京都)発の肥料、勝浦駅(千葉県)発の魚肥などが毛呂駅に搬入されている。一方、毛呂駅からは、玄米が保土ヶ谷駅(横浜市)や芝浦駅(東京都)へ、八高線の貨物輸送の大半が、秩父セメント(現・



JR貨物によると、記録が残っている1987年以降、八高線の貨物輸送の大半が、秩父セメント(現・



1983年に毛呂駅が開通したことを示す駅舎の本札と駅長長(毛呂駅で)

八高線の建設計画は、1895年、富岡製糸場を中心に絹産業で栄えた群馬県南部と、消費地の東京都八王子市を結ぶ目的で浮上した。政府は1903年に整備原案を作成。しかし、日露戦争などで実現は遅れ、八王子―高麗川間の建設が正式に決まったのは22年のことだった。

現在も非電化 高麗川―倉賀野

また、高麗線が上野―高麗川間の全線で52年に電化されたのに対し、八高線の電化は開業から60年以上たった96年。しかも、八王子―高麗川駅間のみで、現在も高麗川―倉賀野駅間は電化されていない。「乗降客が少な、1日の運転本数も少ないため」(JR東日本高崎支社)とい

桑の都 八王子市



桑並木通り





桑並木

八王子駅前「桑並木の由来」の碑より

八王子は古くから桑都又は桑の都と呼ばれています。これは文政年間の大学者塩野適齋の著に桑都日記及び桑都古意の名編があり、いずれも八王子を桑都とよんでいることからもうかがい 知ることができます。この別称は八王子が昔から 生糸の産地として養蚕が盛んであり現在の市域 一体に広く桑の木が栽培されていたことを物語 っています。世界でもまれなこの桑並木は昭和二十九年秋、当時の片倉工業株式会社八王子製作所等から寄附されたくわ木五十余本を桑都の名にちなみ織物のまちの象徴として、八王子市及び蚕桑関係者らによって植栽されたものです。現在東京都の管理下であり、並木通り付近の人たちをはじめ多くの市民の 保護を受けながら八王子の昔を語りつづけています。

昭和五十六年二月 八王子市 桑並木保存会



絹の道 八王子から横浜へ

<http://www.city.hachioji.tokyo.jp/kyoiku/rekishibunkazai/004414.html>



絹の道

「絹の道」の愛称で親しまれているこの道は、かつては「神奈川往還」または「浜街道」と言われていました。安政6年（1859）に横浜が開港し、その後、鉄道が発達する明治の中ごろまで、輸出用の生糸が多数運ばれたルートのひとつです。八王子周辺地域で生産された生糸は、八王子宿に集められ、この道を通して横浜に運ばれて行きました。その、生糸取引で短期間に巨額の富を成したのが「鑑水商人」です。現在、「絹の道」は御殿橋のたもとから、「絹の道碑」の前までの約1.5キロメートルが市の史跡に指定されています。このうち、特に昔の面影をよく残す未舗装部分は文化庁選定「歴史の道百選」にも選ばれました。峠の一番高いところには、かつて道を行き交う旅人や村内の安全を祈って、道了尊を祀ったお堂がありました。現在は取り壊されて、跡地が大塚山公園として整備されています。

絹の道 八王子から横浜へ



生糸の輸送 八王子から横浜へ

JR横浜線開業100周年と絹の道

横浜港は2009年6月2日に開港150周年を迎えますが、横浜線が開業したのも横浜港の産物でした。

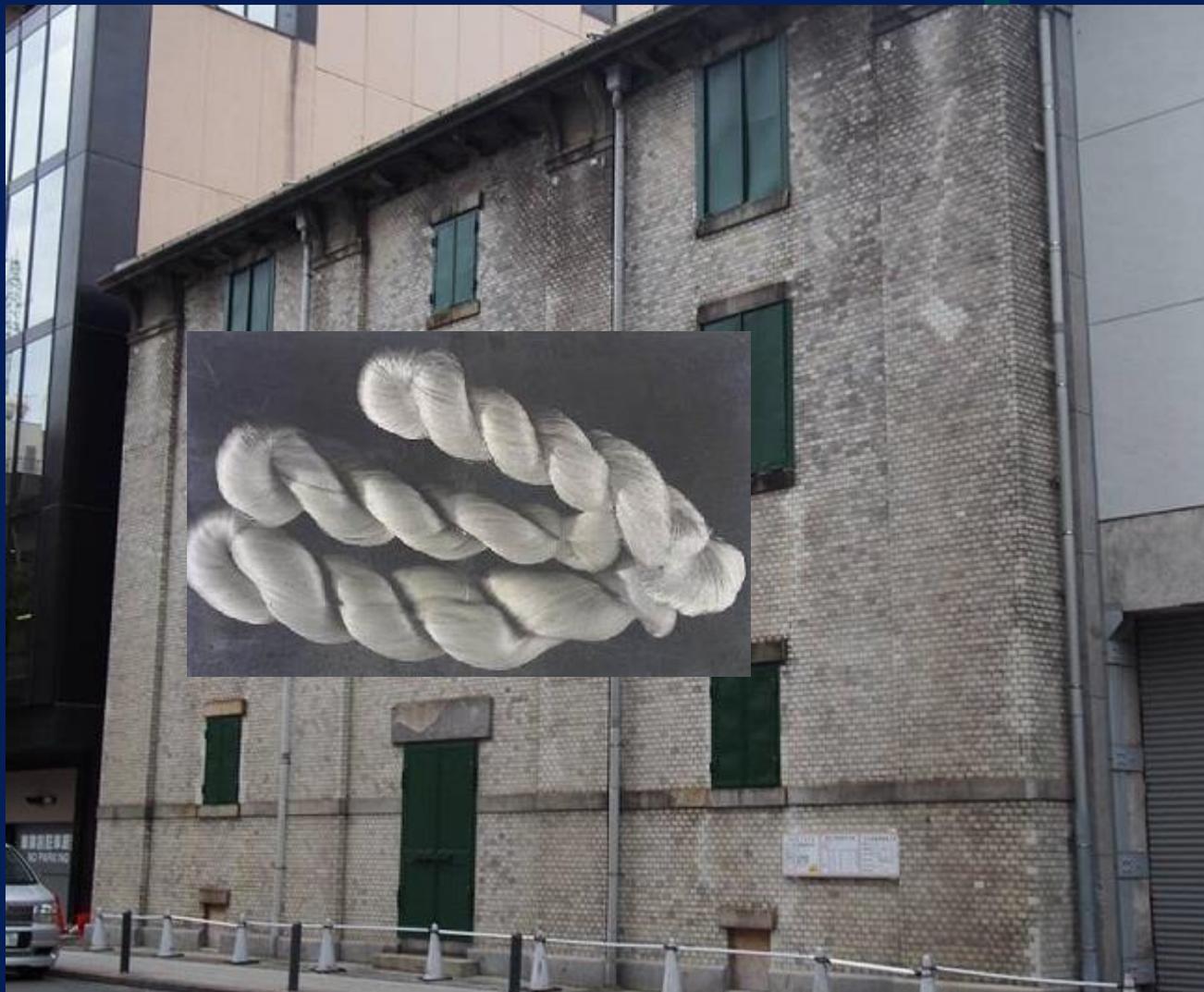
横浜開港後、欧州の生糸産地で蚕病が大流行し、生糸の生産量が大幅に低下したため、生糸を求めて多くの外国商人がやってきました。生糸輸出のラッシュ時には、上州（現在の群馬県）や信州（長野県）を産地とする生糸が八王子を経て神奈川宿に運ばれたことから、この道は「絹の道」とも呼ばれました。このように、横浜や八王子では、「絹の道」から諸外国へ生糸を輸出することで、巨大な富を手に入れた生糸貿易商が、「絹の道」に変わる鉄道開設を求め、国に対して申請を繰り返しました。

まず、明治19年（1886年）に横浜の豪商・原善三郎らが八王子～川崎間に「武蔵鉄道」を敷設申請をしましたが却下されました。明治27年（1894）には横浜鉄道株式会社を設立して八王子～横浜間に横浜線の前身となる路線の敷設を申請し続け、明治38年（1905）に5度目の申請で「国の買い上げにより将来国有化されることも受け入れる」といった条件のもとようやく許可されました。この時、原善三郎はすでに亡く、後継ぎで孫娘の婿である原富太郎（三溪）（横浜市中区の三溪園の創設者）が出資者として加わっていました。

武蔵鉄道の申請から22年後の明治41年9月23日、東神奈川～八王子間で旅客・貨物輸送線として開業しました（42.6キロ）。明治44年（1911）には東神奈川から貨物延長線が敷かれ、海神奈川駅（神奈川区千代町付近、昭和34年（1959）廃駅）が開業しました。しかし当初の目的であった横浜への輸送ルートはすでに中央線東京経由で確立してしまっていたこともあり、「絹の道」の代用鉄道としての役割はほとんど果たすことなく、開通後2年で鉄道院が借上げることになり、大正6年（1917）には国有化されました。そして昭和62年（1987）には国鉄からJRへと再び民営鉄道となり新たな時代が始まりました。横浜線が全線電化されたのは昭和16年4月5日、横浜市内では昭和22年に大口駅が開設された後、沿線の宅地開発が進むにつれて1980代後半には全線複線となり、昭和37年に鴨居駅、昭和39年に新幹線との乗換駅である新横浜駅、昭和54年には十日市場駅がそれぞれ開設されている。

明治43年(1910) 旧三井物産横浜支店生糸倉庫

— 横浜港の生糸貿易を支えた —



1859年 横浜開港 生糸・絹貿易の街として発展

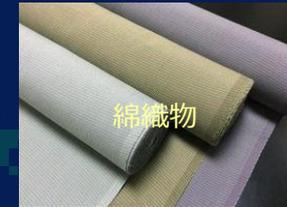
— 生糸貿易港として世界に名を馳せた —



輸出品



明治42年当時の横浜港



輸入品

1858年（安政6）7月、日米通商条約調印され、翌1859年7月1日（安政6年6月2日）横浜、長崎、函館の3港において貿易が開始された。当時の輸入品の筆頭は綿花、綿製品であって、輸出品の主なものは生糸・蚕種それに茶であった。この輸出品中に主位を占める生糸・蚕種の輸出は、これまで国内需要のみであったわが国蚕糸業に異常な刺激となって、すでに養蚕、製糸を行っていた地方にはますます拡大し、また新しい地帯にも蚕糸業を勃興せしめる契機となった。開港当初の1859年においては48万斤であったが、その後毎年増大して文久2年（1862年）には241万斤に達し、開港当時の約5倍という飛躍的に進展を見た。



明治28年(1895) 横浜生糸検査所の設立

— 生糸品質の均斉化と改善のために —



生糸検査

製糸工場で作られた生糸の取引にあたっては国が定めた項目について検査を受けることが義務づけられている。農林水産省農林水産消費技術センター（横浜・神戸）、県立（山梨）・財団法人生糸協会などの生糸検査所（福島・前橋・丹後）で検査が行われている。また特別に指定を受けた工場では自主検査（工場検査）が認められている。国が定めている生糸品質の検査には品位検査と正量検査がある。

（1） 品位検査

- ① 総荷整理検査
- ② 料糸検査（再繰切断検査、織度検査、糸むら検査、節検査、強力および伸度検査）
- ③ 格付け

以上に述べた検査の結果をもとに格付表と対比して検査した生糸品位の格付けを行う。

（2） 正量検査

生糸に含まれる水分は生糸が作られるときの条件や生糸の重量を量ったときの気象条件などによって変化する。そのため生糸の取引にあたっては国が定めた一定の水分率（公定水分率という。生糸の場合は11%）を含んだ重量（正量）によることが必要である。そのため生糸検査ではサンプルの8認め生糸を乾燥して無水量を求め、次式によって生糸の水分率を算出して荷口生糸の無水量を推定し、その重量の11/100を加算したものを正量として取引の重量が定められることになっている。

$$\text{水分率}\% = (\text{原量 g} - \text{無水量 g}) / \text{原量 g} \times 100$$

明治中期から後期にかけて生糸の輸出量は、逐年増加の一途をたどったのであるが、それに伴って品質の均斉化と改善を要望する声内外から盛り上がりしてきた。明治43年（1910）農商務省が開催した蚕糸業生産調査会は政府の諮問に対して、蚕糸業の重要性にかんがみ、蚕品種統一改良のため国家が原蚕種製造業務を行う必要があるとし、かつこれが施設機関をすみやかに創設することを促す旨を答申した。

明治44年(1911) 農商務省原蚕種製造所の設立

— 外国繭に優る国産優良繭の育成のために —



写真中央
加賀山四郎所長

明治43年(1910年)農商務省が開催した蚕糸業生産調査会は政府の諮問に対して、蚕糸業の重要性にかんがみ、蚕品種統一改良のため国家が原蚕種製造業務を行う必要があるとし、かつこれが施設機関をすみやかに創設することを促す旨を答申した。政府はこれら世論に対応して明治44年(1911年)5月、原蚕種製造所官制を公布し農商務省において創立事務を開始するとともに本所の位置を東京都豊玉郡杉並村高円寺に定め、翌45年(1912年)3月庁舎の完工をみた。



大正4年 蠶業試験場

加賀山所長の開所式訓辭

明治四十四年（一九一三）五月

蚕糸業は、本邦重要なる産業にして、養蚕に従事するもの百六十万戸、農家総数の三分の一を占め、蚕種製造業者一万五千、製糸工場三千五百を加えると、国家経済の上より見ても重要な地位を占めており、生糸は輸出品として第一位を占め、一カ年の輸出額は一億五千万円、絹製品を加えれば二億円を超え、わが国の輸出総額の三割七分を占め、前途洋々たるものがある。

しかし、幾多の競争国あり、また一方には人造絹糸業の驚くべき進歩ありて、安閑として惰眠を許さざる状況なり。学術的研究の成果を応用するならば、あえて恐れるに足らない。

そのためには広く学術的研究を深め、その成績の普及を計らなければならぬ。その故に当所が設立されたのである。

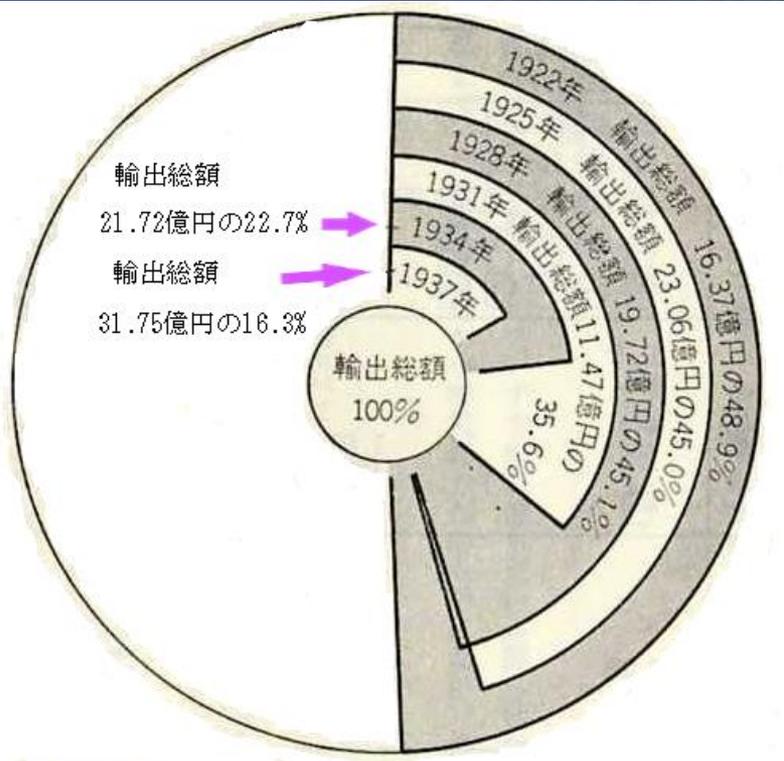
生糸がわが国の輸出貿易の最重要物資として、

— 近代日本の国勢伸長の上に果たした役割は今更に論ずるまでもない！ —

1864年～1869年 蚕種輸出額			幕末における 生糸輸出額			1887年～1897年 生糸輸出額			1897年～1919年 生糸輸出額		
年次	輸出枚数	輸出価格	年次	数量	価額	年次	数量	価額	年次	数量	価額
1864 元治元年	千枚 450	千円 1,242	1859 安政6年	千斤 487.625	千円 1,175.176	1887年 (明治20)	千斤 3.147	千円 19,391	1897年 (明治30)	千斤 6.919	千円 55,630
1865 慶応元年	3,000	5,530	1860 万延元年	812.780	2,739.069	1888	4,700	25,966	1898	4,837	42,047
1866	1,500	3,300	1861 文久元年	927.424	2,555.126	1889	4,128	26,620	1899	5,946	62,627
1867	950	3,610	1862 同2年	2,414.914	7,293.042	1890	2,110	13,859	1900	4,630	44,657
1868 明治元年	2,400	11,280	1863 同3年	1,294.719	4,453.833	1891	5,362	29,438	1901	8,697	74,667
1869	1,400	7,924	1864 元治元年	1,343.164	6,330.028	1892	5,431	36,320	1902	8,078	76,859
			1865 慶応元年	941.602	4,359.617	1893	3,715	28,173	1903	7,315	74,428
			1866 同2年	1,101.546	6,146.627	1894	5,484	39,355	1904	9,658	83,740
			1867 同3年	1,000.117	5,670.663	1895	5,811	47,871	1905	7,279	71,998
						1896	3,918	28,830	1906	10,394	110,499
						1897	6,919	55,630	1907	9,354	116,888
									1908	11,521	108,609
									1909	13,469	124,243
									1910	14,846	130,832
									1911	14,456	128,875
									1912 (大正元)	17,102	150,321
									1913	20,228	188,916
									1914	17,148	161,797
									1915	17,814	152,030
									1916	21,741	267,036
									1917	25,828	355,155
									1918	24,344	370,337
									1919	28,622	623,618

年	生糸輸出額の割合	生糸輸出額の割合	輸出総額100%
1922年	輸出総額 16.37億円の48.9%		
1925年	輸出総額 23.06億円の45.0%		
1928年	輸出総額 19.72億円の45.1%		
1931年	輸出総額 11.47億円の35.6%		
1934年	輸出総額 21.72億円の22.7%		
1937年	輸出総額 31.75億円の16.3%		

生糸 わが国産業の近代化を支えた輸出品



生糸・絹織物・絹製品の輸出額

1858年（安政5年）日米通商条約で、横浜、長崎、函館の3港開港当時、輸入品の筆頭は綿花、綿製品で、輸出品の主なものは生糸・蚕種それに茶でした。これまで国内需要のみであったわが国蚕糸業は異常に刺激となって、すでに養蚕、製糸を行っていた地方にはますます拡大し、新しい地帯にも蚕糸業を勃興せしめる契機となりました。とくに明治中期以降、欧米殊に米国における絹織物の興隆は生糸の需要を増大し、生糸輸出が盛んになった。かくして蚕糸業はわが国の代表的な輸出産業の大宗として、その製品（蚕種、生糸、絹織物）の大半を輸出し、外貨獲得に大きな役割を果たし、日本の近代化に寄与しました。大正末期から昭和初期にかけて輸出総額に占める農産物の比重は漸減傾向にあったが、生糸輸出だけはますます増大の一途を辿る。特に1922年（大正11年）には輸出総額の中で48.9%に達し、1930年～1934年（昭和5年～昭和9年）までの平均でも、その輸出金額は総輸出金額の24.1%を占めていた。わが国の蚕糸業がもっとも最盛期だった昭和初期には、全国農家の約40%に当たる221万戸が養蚕業に従事し、桑園面積は全畑地の約4分の1の71万haを占めた。1930年（昭和5年）には繭生産量は39.9万トンという、わが国史上最高を記録。当時の製糸工場数は12,640工場、その従業員数は約53万人に達した。

昭和一けたのわが国の蚕糸業は、依然として隆盛といえる内容を誇っており、1931年（昭和6年）には満州事変がはじまり、1932年（昭和7年）には5・15事件が起こるなど、世の中が騒がしくなるなかで、生糸や絹織物は依然として輸出上重要な地位を占めていた。大正末期から昭和初期にかけて、繭糸・絹織物・絹製品の合計輸出額は輸出総額の45%にも達していたのである。日本の近代化や富国強兵において蚕糸業が果たした役割と意義は、すでに多くの人々からも指摘されている。蚕糸業が国全体の期待を背負っていたことは間違いない。

引用文献;伊藤智夫著「カイコはなぜ繭をつくるか」講談社,1985年

横浜 今でもシルクの街

— シルク博物館 —



昭和34年(1959)3月、横浜港開港百年記念事業としてシルクセンター国際貿易観光会館（山下公園の向かい）が建設され、シルク博物館は会館内に開設された。シルクを専門的に扱う博物館として、現在、世界的にも貴重な施設になっています。横浜の伝統産業のひとつに、生糸輸出の盛んだったころに生まれたシルクスカーフがあります。

養蚕の隆盛期 輸出用生糸 アメリカ・フランスへ

— 19世紀末 生糸輸出の増加にともなって —



アメリカ・シルクの町
ニュージャージー州パターソン

	比率(%)			
	イギリス	アメリカ	フランス	その他
明治6年	47.2	0.6	32.2	20.0
7	39.8	7.7	40.9	11.6
8	36.1	0.5	53.9	9.5
9	43.7	1.8	45.6	8.9
13	17.2	37.6	43.9	1.3
14	18.9	24.2	56.5	0.4
15	15.1	34.6	48.9	1.4
16	15.2	33.2	51.1	0.5
17	4.4	50.6	44.8	0.2
18	2.5	35.8	42.7	1.0
19	4.2	54.0	41.2	0.6
20	5.0	55.9	35.0	4.1
21	7.8	50.6	39.2	2.4
22	1.3	55.1	41.2	2.4
23	0.5	66.0	32.0	1.5
24	2.6	58.5	36.7	2.2
25	1.3	61.2	34.7	2.8



「横浜開港と生糸貿易」
シルク博物館部長 小泉勝夫
出典：横浜市史 第三巻上 p.470

絹織物産業の町
フランス・リヨン

1885年（明治18年）から5年間に於いて生糸輸出額は倍増しており、アメリカ、フランスへの輸出額もまた倍加している。さらに1887年（明治20年）以降に生糸輸出額は上昇している。1897年（明治30年）から1919年（大正8年）に於いた期間は年により一進一退はあったが比較的順調に生糸輸出が伸長し、機械製糸の発展と生糸の標準化＝規格化が行われ、それにともなつて養蚕の拡大と養蚕技術の改良進歩が著しく、特に一代雑種、夏秋蚕の増大、桑品種「一ノ瀬」育成によつて特長づけられ、わが国蚕糸業が最も順調に伸びた時代であつたといえよう。1906年（明治39年）以降は数量で1千万斤、価格において1億円を突破し、さらに1916年（大正5年）以降は数量で2千万斤、価格において2億円を上回っている。しかもその増進の仕方は2、3年を除けば直線的な上昇傾向を見せている。また輸出先は米国が約6割を占めていたが（1889年）、この比重はますます高くなっている。米国の生糸輸入高を国別に見ると、1901年（明治34年）には米国の全輸入生糸の約5割をわが国の生糸が占めていたが、1911年（明治44年）以降は6割を越え、1914年（大正3年）第1次大戦勃発は7割、大戦後の1918年（大正7年）からは約8割を越える激増ぶりであつた。このような生糸輸出の増進、殊に米国向け輸出の増大は、米国絹織業の発展とともに種々な条件がわが国生糸輸出に有利であつた。

輸出生糸 婦人用ストッキング原料

— アメリカにおける婦人用ストッキングの大流行 —

婦人用ストッキングのアメリカにおける大流行がなければ蚕糸業の命運はきわまっていたかもしれない。アメリカのフルファッション靴下流行の端緒は第一次世界大戦期におけるアメリカ中・上流階級家庭子女の社会進出であるといわれる。また当時、大都市では中・高層のオフィスビルの建設が盛んに進められたが、これらの建物には蒸気による集中暖房設備があった。足首まであったスカートは短くなり、日本産生糸を原料とする長靴下の着用が大きな流行となった。第二次世界大戦の直前ころには、絹靴下の年間消費量は5000万ダースに達し、わが国の輸出総額の20%を靴下用を主とした生糸が占めた。昭和初期の生糸需要が靴下用を中心としたことは蚕糸技術に大きな影響を与えた。靴下用はとくに細織度の高級生糸が必要とされ、蚕品種の改良が進められた。このため養蚕農家の現場の技術は、日夜たえまない給桑作業など労働集約的な性格を余儀なくされた。第二次世界大戦開戦直前に生糸輸出が中断されたのち、アメリカでの靴下原料は終戦当時までレーヨンなどの合織が用いられた。この間、新たな化学繊維として登場したナイロンは軍需用として急速な発展をみせ、終戦と同時に靴下市場に登場し、はやくも1946年（昭和21年）には過半数がナイロンによって占められた。

おわり